

# 菩薩の行位と華嚴の成仏説について

## 一 色 順 心

菩薩の行位といい、成仏説といっても、それは仏教の広い分野に亘るものであるが、中国における華嚴宗の大成者、賢首大師法蔵（637-723）の諸著作にみられる信満成仏説を中心にその内容を考察し、菩薩の修行階位を説く經典をも念頭に置きつつ、華嚴の成仏説の内容を検討することとしたい。華嚴の成仏説について、とくに法蔵の信満成仏説や三生成仏説は、従来より関係論文も比較的に残されており、その研究の歴史は古いといえる。近年には、法蔵以外の華嚴の成仏説<sup>①</sup>についても研究が進められるに至っている。とくに、吉律宜英著『華嚴禅の思想史的研究』（昭和六十年三月、大東出版社）には、宗密（780-841）の本来成仏論すなわち華嚴禅の確立に至る思想史的研究がなされている。その書物の前半部分に

は「法界縁起の成仏論」という章題のもとに、智儼・義湘・法蔵などの諸学匠の成仏論が示されており、中でも法蔵においては、『華嚴五教章』『華嚴經旨帰』『華嚴經探玄記』と次第する彼の著作を通して、成仏論に深まりがみられるという。初期の著作である『五教章』の中では「義理分齊」と「所詮差別」の箇所に成仏説が示されており、彼の信満成仏説は、別教一乗の第五円教の成仏論であったこと。また、『五教章』以後の成立になる『華嚴經旨帰』では、これまでの三生成仏や信満成仏をまとめるとともに、新たな成仏論として「旧来成仏」とも名づけられるような成仏論が示されていること。さらに以後の著作である『探玄記』の中では、その性起品釈によつて、法蔵の新たな成仏論として「旧来成仏」（旧よりこのかた成仏している）ということがある。すなわち、法蔵は、これまでの「信満成仏」とは全く別の成仏論、つま

り、五教の中のその他の四教に寄同することのない、円教独自の成仏論を立てようとしたこと、などが明らかにされている。このように吉津氏の所論には、法蔵の成仏説に関しても示唆に富む指摘が随所にみられるのであるが、今一度、『五教章』『探玄記』を通して、信満成仏といっている根拠、およびその意義内容を考察し、また『華嚴經』などの菩薩の修行道を説く經典が信ということをとどのように説き、それが、行位の問題との関わりにおいてどのような意義をもつか、その一端を明らかにしたいと考える。

## 二

菩薩の修行の位次がまとまったかたちで説示されている經典は、『華嚴經』『仁王般若經』『梵網經』『菩薩瓔珞本業經』などであると考えられるが、その修行階位は、四十位・四十二位・五十二位というように諸説があり一定しない。また、各々の經典が、十信・十住・十行・十迴向・十地などの修行道を、段階的なものとしてみなしていたのかは明らかではない。しかしこれらの經典を受容した中国の仏教者たちによって、それらが四十位・四十二位・五十二位というような一連の階位を説いている

ものとしてみられたことは確かであると思われる。法蔵は『探玄記』卷第二の中で、『華嚴經』の七処八会三十四品を教起因縁分より依人入証成徳分までの五分にわけており、各品の註釈をほどこすさいには信・住・行・迴向・地などに対配しているのである。そのうちの十信に相当する品が、明難品・淨行品・賢首菩薩品の三品であることは、『探玄記』卷第四の明難品釈に「通じて論ずれば此の三品は十信の行法を明かす」とあることによって明らかである。とくに賢首菩薩品第八には、偈頌をもって菩薩の行とその功德が説かれる。すなわち、賢首菩薩が、文殊菩薩に対して答えた偈頌に、

菩薩於生死 最初發心時  
一向求菩提 堅固不可動  
彼一念功德 深広無邊際  
如來分別説 窮劫猶不盡

(大正九・四三二―三a)

とあるように、菩薩が生死の中にあつて初めて發心して一向に菩提を求めることは、堅固であつて何ものもそれを動ずることはできない。たとえ一念の功德であつてもそれは無限の深さと広さをもつものであり、これを如來が分別して説かれた場合に、長い時間をかけても説き尽

くすることはできないとし、深心の淨信は壞すべからざることが示されている。その淨信の内容をなすものは、三宝を信敬することであり、不壞の信によって発心を成就するのである。<sup>⑥</sup>つまり菩薩の発心は、諸仏とその正法を信じ、菩薩の行ずる道を信じて菩提に信向することによってはじめて可能となる。その意味で、信はあらゆる行の根本であるといえるのである。そして、同じく賢首菩薩品には、信の功德について、

信為道元功德母	增長一切諸善法
除滅一切諸疑惑	示現開發無上道
淨信離垢心堅固	滅除憍慢恭敬本
信是寶藏第一法	為清淨手受衆行
信能捨離諸染著	信解微妙甚深法
信能轉勝成衆善	究竟必至如來處
清淨明利諸善根	信力堅固不可壞
信永除滅一切惡	信能速得無師寶
信於法門無障礙	捨離八難得無難
信能超出生衆魔境	示現無上解脫道
一切功德不壞種	出生無上菩提樹
長養最勝智慧門	信能示現一切仏
是故演說次第行	信樂最勝甚難得

譬如靈瑞優曇華

亦如隨意妙宝珠

(大正九・四三三a~b)

と、説示されている。法藏はこの七頌を「信が能く余徳を成ずる」ことを明かすものであるとし、信の成ずるところの功德を二十種の功德にまとめる。冒頭の「信は道の元、功德の母なり」という経文は、信が能く福徳と智慧を生ずるものであるとし、「覺道の元、功德の母」なることを明らかにしている。また信が「一切功德の不壞の種」であるという文を、彼は「仏地一切の諸功德法は、みな不壞の信をもって彼の因種となさざるはなし」と解釈する。何故に信が不壞とされるのかといえば、信の満心において不退を得るからであり、この信に依って発心が可能になるからであるといえる。菩薩道において信はその根本でありあらゆる功德を生み出すものであるとする賢首品の所説を、法藏は信と発心の問題として捉え、信を信満入住すなわち菩薩の修行道における成仏の問題として解釈していることが窺われるのである。

賢首菩薩品は、普光法堂会という会座において菩薩道の元となる信の功德が説かれているが、次にその会座が初利天に移り、十住品が説かれる。そこには、菩薩の十住行の各々の名が、初発心住より第十灌頂住まであげら

れたうえで、まず最初の初発心住において菩薩は何を見聞するのが示される。すなわち、十住品第十一に、

仏子、何等は菩薩摩訶薩初発心住。此菩薩見三十二相八十種好妙色具足尊重難遇、或觀神變、或聞說法、或聽教誡、或見衆生受無量苦、或聞如來広説佛法、發菩提心求一切智、一向不廻。此菩薩、因初発心得十力分。

(大正九・四四四c)

とあり、その十力分の内容および初発心住の菩薩が学すべき十法が示される。このような学びがなされねばならないとされる理由は、初発心の菩薩が、自身の菩提心を堅固にさせ無上道を成じさせようと欲しているからである。そして次の梵行品第十二の末尾には、

初発心時便成正覚。知一切法眞実之性、具足慧身不由他悟。

(大正九・四四九c)

と説かれている。菩薩が正覚を成ずるのは何時においてであるかといえば、初発心の時であることが示されるのである。法蔵は初発心の時に正覚を成ずる根拠を、初発心菩薩功德品の「初発心の菩薩は即ち是れ仏なるが故に悉く三世諸如来と等し」という文に見出し、行が満じて位に入る時に普賢位を得るのだと述べている。菩薩行と

しては初歩の段階とされがちな初発心を仏と同等なものとみなし、その発心の時にすでに疾やかに一切の諸仏の功德が具わり、内に自ら開覚することを明らかにしている。初発心時は因、便成正覚は果であると考えられるが、彼は因果円融、相即無礙の立場からこれを解釈したといえよう。梵行品のこの文が、法蔵の成仏説においては初住成仏と信満成仏の關係として、しばしば論ぜられるところでもあるといえる。

菩薩の行位を説く大乘經典には、信ということがどのように説かれているのか。まず『仁王般若経』受持品には、五忍の菩薩が説かれ、その第一伏忍を明かす中で信ということが示されるが、

善男子、習忍以前行十善菩薩有退有進。譬如輕毛隨風東西、是諸菩薩亦復如是。雖以十千劫行十正道發三菩提心乃当入習忍位。

(大正八・八三一b)

とあるように、習忍位以前に相当する。十善を行ずる菩薩には進退があつて定まりがなく、そのありさまは輕毛が風に吹かれて東や西に靡くようなものだたとえられている。また、『梵網経』卷上には、三賢位に相当するといえる三十心と、聖位に相当する十心(十地)が説か

れるが、十信については説かれない。しかし、

金剛種子有<sub>レ</sub>十心。若<sub>レ</sub>仏子、信心者一切行以<sub>レ</sub>信爲<sub>レ</sub>首衆徳根本。  
(大正二四・九九九。)

とあって、この「信を以て首と爲し衆徳の根本なり」という表現は、先の賢首菩薩品の「信は道の元、功德の母なり」と同趣旨の文であり、『梵網經』は『華嚴經』を承けたものであることが明らかである。次に、菩薩の行位が他の經典にも増してまとまったかたちで説かれていると考えられるものは『菩薩瓔珞本業經』である。この經には、十住以前の菩薩の修行が、

未<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>住前有<sub>レ</sub>十、順<sub>ニ</sub>名字<sub>ニ</sub>菩薩常行<sub>ニ</sub>十心<sub>一</sub>。所謂信心念心精進心慧心定心不退心迴向心護心戒心願心  
仏子修<sub>ニ</sub>行是心<sub>一</sub>若<sub>レ</sub>經<sub>ニ</sub>一劫二劫三劫<sub>一</sub>、乃得<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>初住位中<sub>一</sub>。  
(卷上、集衆品第一、大正二四・二〇二一c)

仏子、從<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>識<sub>レ</sub>始<sub>ニ</sub>凡<sub>ニ</sub>夫<sub>ニ</sub>地<sub>一</sub>、值<sub>ニ</sub>仏菩薩<sub>ニ</sub>教法中起<sub>ニ</sub>一念信<sub>一</sub>便發<sub>ニ</sub>菩薩提心<sub>一</sub>。是人爾時住前名<sub>ニ</sub>信想菩薩<sub>一</sub>、亦名<sub>ニ</sub>仮名菩薩<sub>一</sub>、亦名<sub>ニ</sub>名字菩薩<sub>一</sub>。其人略行<sub>ニ</sub>十心<sub>一</sub>。所謂信心進心心慧心定心戒心迴向心護法心捨心願心。  
(卷下、積義品第四、大正二四・二〇一七a)

と説かれている。これに依れば、いまだ初住に入っていない者は、信想の菩薩・名字の菩薩・仮名の菩薩など

名づけられ、信心等の十心を行ずるものであるといえよう。『菩薩瓔珞本業經』の修行階位としては、賢聖名字品に十住より妙覺地に至る四十二賢聖が、また、賢聖學觀品ではその四十二賢聖を六種性に区分して各々の位次が掲げられている。従って、この經には、信はいわゆる賢聖の中には加えられていないと考えられるが、賢聖の初めである發心住を明かす中で住前の十心(十信心)に闕説があり、その信心等の十心を修行することによって初發心住に入ることを得るのである。

### 三

法藏は、『華嚴五教章』の行位差別において、小・始・終・頓・円の五教に約して、行相と位相に関する差別を明かし、自身の成仏説を論じているといえる。五教の各々について位相と不退と行相の三義の面から説いているわけであるが、今は不退ということに焦点を当てて菩薩の行位を考察することとしたい。

菩薩の歩みにおいて惡趣や二乘地に退墮することなくまた、自ら証得したところの法を退失しなと言いうるのはどこにおいてであるか。つまり不退の位を菩薩道のどこに定めるのかによって、行位の差別がより明瞭にな

るといえる。五教の中の最初、小乗教では、不退の位を得るのは四善根の第三の忍位<sup>④</sup>においてであり、そこにおける不退の意味は惡趣に墮することがないことをさすと考えられる。また小乗教と同様にその解説が略説にとどまっているのは頓教であるが、あらゆる相を離れているがゆえに一切の行位は不可説であり、従って不退位を定めることもないのである。始終二教については、法藏は大乗の諸經論を豊富に引用しつつその内容を詳述している。まず、始教の不退について『華嚴五教章』に、

二不退位者、依<sub>二</sub>仏性論<sub>一</sub>、声聞至<sub>二</sub>苦忍<sub>一</sub>、緣覺至<sub>二</sub>

世第一法<sub>一</sub>、菩薩至<sub>二</sub>十迴向<sub>一</sub>、方皆不退也。当<sub>レ</sub>知此中

声聞緣覺非<sub>二</sub>是愚法<sub>一</sub>。是故皆是此始教中三乘人也。

亦可、菩薩地前総説為<sub>レ</sub>不退。以<sub>二</sub>其猶墮<sub>一</sub>諸惡趣<sub>一</sub>故。

如<sub>二</sub>瑜伽云<sub>一</sub>、若諸菩薩住<sub>二</sub>勝解行地<sub>一</sub>、猶住<sub>二</sub>惡趣<sub>一</sub>故、

此尽<sub>二</sub>第一無數大劫<sub>一</sub>。如<sub>レ</sub>是等也。

(大正四五・四八八。九a)

とあって、不退位に二説あることが示されている。前者は『仏性論』による説で、声聞は苦法智忍、緣覺は世第一法、菩薩は十迴向において不退を得る。後者は『瑜伽論』による説で、菩薩の地前には惡趣に墮することがあるから地前を退とみなすのである。この二説には菩薩の

不退位を十迴向に置くのかそれとも惡趣に退墮することのない地上に置くのかで相違があるが、法藏は『探玄記』巻七に、十迴向の位を定めることについて述べる中に、この『五教章』の所説と類似した説き方をなしている。これは金剛幢菩薩迴向品釈に相当する箇所で、「第四に定位とは、此は解行位の終り、第一僧祇の滿に当たる。仏性論に依れば、此の位の滿に至りて方に不退の位と名づく。瑜伽に依れば、此の中に猶自ら地獄の中に墮するなり。」<sup>⑤</sup>とある。始教に約して十迴向の位を定めるのであり、『仏性論』に依れば解行位の終りすなわち十行の滿に至って不退を得るのであるから、十迴向といってもそれは初迴向を不退位とする意味でなければならぬ。

次に、終教では不退をどのように位置づけているかといえ、十住の初すなわち初發心住において、もはや二乘地に退墮することはないとする。従って惡趣や凡位に墮することもない。ところで何故に不退の位を初住に定めたのか、その根拠を法藏は、信ということをもとに見るのかという観点から、次のように述べる。『五教章』の終教の位相を論じて、

若依<sub>二</sub>終教<sub>一</sub>、亦説<sub>二</sub>菩薩十地差別<sub>一</sub>、亦不下<sub>二</sub>以<sub>一</sub>見修等

名・説<sup>上</sup>。又於<sup>ニ</sup>地前<sup>ニ</sup>但有<sup>ニ</sup>三賢<sup>一</sup>。以<sup>ニ</sup>信<sup>一</sup>但是行非<sup>ニ</sup>是位<sup>一</sup>故。未<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>不退<sup>一</sup>故。

本業經云未<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>住前有<sup>ニ</sup>此十心<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>位也。

又云、始從<sup>ニ</sup>凡夫地<sup>一</sup>・值<sup>ニ</sup>仏菩薩<sup>一</sup>、正教法中起<sup>ニ</sup>一念信<sup>一</sup>・發<sup>ニ</sup>菩提心<sup>一</sup>、是人爾時名為<sup>ニ</sup>住前信想菩薩<sup>一</sup>、亦名<sup>ニ</sup>仮名菩薩名字菩薩<sup>一</sup>、其人略修<sup>ニ</sup>十心<sup>一</sup>、謂信進等。広如<sup>ニ</sup>彼説<sup>一</sup>。

又仁王經云、習忍已前行<sup>ニ</sup>十善<sup>一</sup>・菩薩有<sup>レ</sup>進有<sup>レ</sup>退、猶如<sup>ニ</sup>輕毛隨<sup>レ</sup>風東西<sup>ニ</sup>等<sup>一</sup>。  
(大正四五・四八九a)

とある。終教の位相においては、十地以前には十住・十行・十廻向の三賢位があるのみであって、信は行に他ならず位とはいえないので、いまだ不退を得ないのである。このことを法藏は、『菩薩瓔珞本業經』『仁王般若經』を教証として、十住と住前の信に退・不退の区別があることを明らかにしている。菩薩の修行階位を説く經典として先述した大乘經典は法藏によって終教の中に編入されていることが知られる。信は位を意味するものでなく、またいまだ進退があつて不退とはいえないことから、初住においてはじめて不退を得るとみなしたのが終教の立場なのである。

菩薩が不退を得る段階について始教と終教には異なり

があり、始教では初廻向、終教では初住という階位においてであつた。それに対して五教の第五円教では、三乗に寄同することのない独自の行位説が示される。『五教章』には別教に依拠して、行位に寄位・約報・約行の三義が立てられる。第二の約報<sup>②</sup>において見聞・解行・証入の三生成仏が、そして第三の約行において自分・精進分の二分が論じられており、それらも信満成仏と別異なものではなく、信満の内容をなすものであることが示されている。第一の寄位に約して顯わす箇所には、

一約<sup>ニ</sup>寄位<sup>一</sup>・顯、謂始從<sup>レ</sup>信乃至<sup>ニ</sup>仏地<sup>一</sup>・六位不同。隨<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>二位<sup>一</sup>・得<sup>ニ</sup>一切位<sup>一</sup>。何以故。由<sup>下</sup>以<sup>ニ</sup>三六相<sup>一</sup>・收<sup>上</sup>故、主伴故、相入故、相即故、円融故。經云、在<sup>ニ</sup>於一地<sup>一</sup>・普攝<sup>ニ</sup>一切諸地功德<sup>一</sup>。是故經中十信滿心勝進分上得<sup>ニ</sup>一切位及仏地<sup>一</sup>・二者其事也。又以<sup>ニ</sup>諸位及仏地等相即等<sup>一</sup>故、即因果無<sup>ニ</sup>二始終無礙<sup>一</sup>。於<sup>ニ</sup>一一位上<sup>一</sup>・即是菩薩即是仏者、是此事也。

(大正四五・四八九b c)

とあつて、円教の位次は、一位を得れば同時に一切位を得るといふ主伴具足・相即相入・円融無礙ということに他ならない。しかし三乗教の位相に寄せて説くならば、信より仏地に至る六位は不同であり、このように円教は

円融<sup>④</sup>と行布の二門をもつて明らかにされるのである。円教の実義よりすれば、浅深高下と次第する階位の不同は説く必要もなく、信満の一位を得れば一切位および仏地を得るのである。相即相入の縁起無礙という理由によって因果無二・始終無礙が成り立ち、一一の位の上に成仏が可能となっているといえる。

信満成仏ということを明らかにするうえに、因果無二の縁起の關係が深くかわりをもつと考えられるが、『五教章』巻四の十玄縁起無礙法門義における第三門、諸法相即自在門には、因果相即ということが問答体をもつて論述される。すなわち、「初発心時便成正覺」とか「初発心菩薩即是仏」と『華嚴經』に説かれたその意味は、因中の徳を讃嘆したにすぎないのにどうしてそれが果徳をさすことになるのか。この問に対して法蔵は、「一乗の義は因果同体にして一縁起を成ずる<sup>⑤</sup>」ものであつて、もしも因が果を得るものでなければ因は因を成じたことにはならないと答える。また、果分は不可説でただ因分のみを論ずるというはずなのに、何故に、十信の終心に作仏得果の法を説くのか。これに答えて、『五教章』巻四に、

令言<sup>⑥</sup>作仏<sup>⑦</sup>者、但從<sup>⑧</sup>初見聞<sup>⑨</sup>已去、乃至第二生即

成<sup>⑩</sup>解行<sup>⑪</sup>、解行終心因位窮満者、於<sup>⑫</sup>第三生<sup>⑬</sup>即得<sup>⑭</sup>彼究竟自在円融果<sup>⑮</sup>矣。由<sup>⑯</sup>此因依<sup>⑰</sup>果成<sup>⑱</sup>之故。但因満者即没<sup>⑲</sup>於果海中<sup>⑳</sup>也。為<sup>㉑</sup>是証境界<sup>㉒</sup>之故、不可説也。

(大正四五・五〇五。)

とある。すなわちここで作仏得果の次第というのは見聞・解行・証入の三生成仏をいうのであつて、第一見聞生において一乗無尽の法門を見聞し、第二解行生でその法門を円かに解行してその最後心に因位窮満する者が、第三証入生において彼の究竟自在円融の果を得るのである。しかしこの因の体は果に依つて成ずるのであつて、果を離れて因を説くことはできないし、また因を説けば必ずその因に対する果を説かねばならない。従つて作仏得果の法は弁ぜられねばならないのである。そうではあるが解行の因位が窮満して果海に没入したところのその果海そのものは証境界であつて不可説に他ならない。以上に掲げた、諸法相即自在門における二つの問答を通して、仏道修行における信満と成仏果との相由相成なることが明らかになるのであり、信満成仏は一乗義としての因果相即ということによって成り立つものであることが知られるのである。



#### 四

『五教章』の行位差別では、菩薩が不退を得るのはどの階位においてであるかという点に注目しつつ、小乗教より一乗円教の成仏説に至る、各々の行位についてこれまで考えてきた。先の四教が菩薩の修行道の中の何れかの時点に不退の位を定めたのに対して、第五円教は、因果相即によって信満成仏を明し、円融と行布の両面から行位が明らかとなるのであるからそれゆえに不退位という位次に拘泥することはなかったといえる。そのことは『探玄記』にも様々な観点から述べられているのであるが、そのことを賢首品釈の中から少しく確かめてみたい。法蔵は『探玄記』賢首品釈において、十信の菩薩が成仏を現するのは暫時の化現をさすのか、それとも実成を意味するのかと問い、三乗初教と終教と一乗円教の立場をあげてこれに答えている。まず初教では十信はいまだ不退を得ていないのだから論外としかいいようがない。終教においては、十信の満心の勝進分の上について十住の初に不退を得るわけであるから、暫時に成仏を化現すものであるという。対して、円教では、十信の菩薩の成仏を実成とみなすわけであるが、そのことは賢首品釈に

次のように述べられる。

若一乗円教中実則不<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>位。寄<sub>二</sub>終教位相<sub>一</sub>以弁<sub>レ</sub>之、於<sub>二</sub>信満不退之際<sub>一</sub>則明<sub>下</sub>得<sub>二</sub>彼普賢法界行徳<sub>一</sub>具撰<sub>二</sub>因果<sub>一</sub>円融無礙<sub>上</sub>。若以<sub>二</sub>因門<sub>一</sub>取則常是菩薩、若果門取則恒是仏  
(大正三五・一八九a・b)

すなわち円教においては実なるものであって、本来、位に依るものではない。それを終教の位相に寄せて論ずるとき、信満不退の際に普賢法界の行徳を得て因果を撰して円融無礙なることが明らかになる。本来、位に依ることのない円教が信満成仏を説くのは終教の位相に寄せて説かれた場合であることが明らかとなる。このことは円教に円融と行布の両面あることを表すものといえることができる。賢首品釈に、

又此信門中展転鉤鎖該撰如<sub>レ</sub>是。十地等者以<sub>二</sub>信爲道元功德母<sub>一</sub>諸位行相皆信而成。故上総云<sub>下</sub>信能転勝成衆行<sub>一</sub>究竟畢至<sub>中</sub>如来处<sub>上</sub>斯之謂也。又云在<sub>二</sub>於一地<sub>一</sub>普撰<sub>二</sub>一切諸地功德<sub>一</sub>。是此一乘円教法也。三乗中則不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>此。  
(大正三五・一八八c)

と示されるように、行布と円融の二つの在り方において信門に一切の諸位が融撰される<sup>②</sup>。つまり菩薩の行位が展転鉤鎖して次第行布していくのであるがそれが信におい

て該撰されるのであり、諸位の行相は信にして而も成ずるのである。

以上、『五教章』『探玄記』を中心に、法蔵の成仏説について、菩薩の行位を説く經典にも注目しながらその一端を考察してきた。まとめてみると、菩薩の修行階位を説く『仁王般若經』『梵網經』『菩薩瓔珞本業經』は、いずれも偽經と目される經典であるが、それらの中で信は初発心に住する以前の歩みとして述べられ、信は輕毛のごとくいまだ進退ありとか、一念の信を起せば菩提心を起すすというように説かれた。『華嚴經』の中では、賢首品に信の功德が繰り返し説かれ、菩薩道において信はその根本をなすものであると同時に一切の功德を生み出すものであることが明らかにされた。法蔵はこれらの經典を受容しつつ、五教に約して菩薩の行位を明かす中で、何れの行位に不退を得るのかということを通して小乗教・始教・終教の行位を明らかにし、とくに終教にみられる信満入住の不退を念頭に置きつつ、しかも前四教とは寄同しない円教の成仏説を説いたのである。それは円教の成仏説を信満成仏に見出したことを意味するが、因果無二・始終無礙という縁起相即を論拠としたものであり、また菩薩の修行道を円融と行布によって位置づけ

たものといえるのである。

#### 註

① 智儼の成仏説については、木村清孝著『初期中国華嚴思想の研究』（昭和五二年十月、春秋社）第七章「成仏道の実践」に關説がある。

② 吉津宜英著『華嚴禪の思想史的研究』一二二頁。

③ インドおよび中国の菩薩階位説については、水野弘元「五十二位等の菩薩階位説」（『仏教学』第一八号、昭和五九年十月）に詳しい。この論文の冒頭に、菩薩の階位説について、「五十二位の中で、十住、十行、十廻向、十地の四十位については、『華嚴經』で説かれているために、五十二の階位説は『華嚴經』に由来すると一般に考えられて来た。しかし十信と等覺、妙覺の十二位は『華嚴經』になく、実は偽經とされる『仁王般若經』や『菩薩瓔珞本業經』に出ているものを中国仏教で採用して、五十二位説としたものと思われる。それに『華嚴經』自体が十住、十行、十廻向、十地の項目をば、下位から上位に至る一連の修行階位として説いているかどうかは問題である。」という指摘がある。

④ 「總長分為五。初品是教起因緣分。二舍那品中一周問答名『學果勸樂生信分。三從第二會至第六會來一周問答名修因契果生解分。四第七會中一周問答名託法進修成行分。五第八會中一周問答名依人入証成德分。』（大正三・一五・一二五b）

⑤ 大正三五・一七五c。

⑥ 淨信と発心について、賢首菩薩品第八に、「深心淨信不レ

可<sub>レ</sub>破壊<sub>一</sub> 恭<sub>ニ</sub>敬供<sub>ニ</sub>養一切仏<sub>一</sub> 尊<sub>ニ</sub>重正法及聖僧<sub>一</sub> 信敬  
三宝故發心 深信<sub>ニ</sub>諸仏及正法<sub>一</sub> 亦信<sub>ニ</sub>菩薩所行道<sub>一</sub> 正心  
信<sub>ニ</sub>向仏菩提<sub>一</sub> 菩薩因<sub>レ</sub>是初發心<sub>一</sub> (大正九・四三三a) とあ  
る。

⑦ 華嚴經探玄記卷四、「是故此中略弁<sub>ニ</sub>所成二十功德<sub>一</sub>。一能  
生<sub>ニ</sub>福智<sub>一</sub>、謂覺道之元福德之母。」(大正三五・一八七c)

⑧ 同右、「十七為<sub>ニ</sub>大果堅因<sub>一</sub>、謂仏地一切諸功德法莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>皆  
以<sub>ニ</sub>不壞之信<sub>一</sub>為<sub>ニ</sub>彼因種<sub>一</sub>。」(大正三五・一八七c)

⑨ 華嚴經探玄記卷第五、「下云初發心菩薩即是仏故悉<sub>ニ</sub>如  
來<sub>一</sub>等。此明<sub>ニ</sub>行滿入位一時即得<sub>ニ</sub>普賢位<sub>一</sub>故、一位即一切位  
乃至仏果無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>具備、故云<sub>ニ</sub>正覺<sub>一</sub>。」(大正三五・二〇二c)

⑩ 梵網經卷上(大正二四・九九七c)には、堅信忍(十  
發趣心)・堅法忍(十長養心)・堅修忍(十金剛心)・堅聖  
忍(十地)が説かれており、その中で、十金剛心の第一に  
「信心」が挙げられている。

⑪ 菩薩瓔珞本業經卷上、賢聖名字品(大正二四・一〇一  
a)

⑫ 同右卷下、賢聖學觀品(大正二四・一〇二b)には  
は、六種性(習種性・性種性・道種性・聖種性・等覺性・  
妙覺性)が説かれ、それが六堅(堅信・堅法・堅修・堅德  
・堅頂・堅覺)、六忍(信忍・法忍・修忍・正忍・無垢忍・  
一切智忍)、六慧(聞慧・思慧・修慧・無相慧・照寂慧・寂  
照慧)、六定(智相定・性定・道慧定・道種慧定・大慧定・  
正觀定)、六觀(住觀・行觀・向觀・地觀・無相觀・一切種  
智觀)とも名づけられるとし、六種性に四十二賢聖を配當  
している。

⑬ 『華嚴五教章』卷二、「第三行位差別者、於諸教中<sub>一</sub>皆  
以<sub>ニ</sub>三義<sub>一</sub>略示。一明<sub>ニ</sub>位相<sub>一</sub>、二明<sub>ニ</sub>不退<sub>一</sub>、三明<sub>ニ</sub>行相<sub>一</sub>。」(大正  
四五・四八八a)

⑭ 同右、「二不退者、此中修行至<sub>ニ</sub>忍位<sub>一</sub>得<sub>ニ</sub>不退<sub>一</sub>也。」(大正  
四五・四八八a) 四善根の第三の忍位において惡趣に墮す  
ることがないとする説は、『俱舍論』卷三三の「煖必至<sub>ニ</sub>濕  
槃<sub>一</sub>、頂終不<sub>レ</sub>斷<sub>ニ</sub>善<sub>一</sub>、忍不<sub>レ</sub>墮<sub>ニ</sub>惡趣<sub>一</sub>、第一入<sub>ニ</sub>離生<sub>一</sub>」(大正  
二九・一二〇c) などに見られる。

⑮ 『華嚴五教章』卷二、「若依<sub>ニ</sub>頓教<sub>一</sub>、一切行位皆不可説  
以<sub>ニ</sub>離相<sub>一</sub>故、一念不生即是<sub>ニ</sub>仏故<sub>一</sub>。」(大正四五・四八九b)

⑯ 『仏性論』卷一、破小乘執品(大正三一・七八一c)

⑰ 『瑜伽師地論』卷三七、成就品(大正三〇・四九八b)

⑱ 『華嚴經探玄記』卷七(大正三五・二四四a)

⑲ 『華嚴五教章』卷二、「十住初即不<sub>レ</sub>退<sub>ニ</sub>墮下二乘地<sub>一</sub> 況  
諸惡趣及凡地耶。設本業經說<sub>ニ</sub>十住第六心有<sub>ニ</sub>退者<sub>一</sub>、起信論

中釈<sub>ニ</sub>彼文<sub>一</sub>為<sub>ニ</sub>示現退<sub>一</sub>也。為<sub>ニ</sub>慢緩者策<sub>一</sub>勵其心故。而実  
菩薩入<sub>ニ</sub>發心住<sub>一</sub>即得<sub>ニ</sub>不退<sub>一</sub>也。」(大正四五・四八九b)

⑳ 『華嚴五教章』卷二(大正四五・四八九c)では、「二に  
は報に約して位を明かさば但、三生有り」とし、見聞位・  
解行位・証果海位の三位が立てられる。

㉑ 同右、「三約<sub>ニ</sub>行明<sub>一</sub>位、即唯有<sub>ニ</sub>二<sub>一</sub>。謂自分勝進。此門通<sub>ニ</sub>  
前諸位解行及以得法分齊<sub>一</sub>處説。如普莊嚴童子等<sub>一</sub>也。」(大  
正四五・四八九c)

㉒ 『華嚴經』卷一、世間淨眼品(大正九・三九五b)

㉓ 同右卷六・七の賢首菩薩品の所説。

㉔ 円融と行布については、『華嚴經探玄記』卷一に、華嚴

經が興起された所由の一つとして「六顯位故者、為レ顯下菩薩修行仏因一道至レ果具五位故。此亦二種。一次第行布門、謂十信十解十行十迴向十地滿後、方至三仏地、從レ微至レ著階位漸次。二円融相攝門、謂一位中即攝一切前後諸位。是故一位滿皆至三仏地。此二無礙広如三下文諸会所說。」(大正三五・一〇八c)と説かれている。

②⑤ 『華嚴五教章』卷四、「此一乘義因果同体成二緣起、得レ

此即得レ彼、由レ彼此相即故。若不レ得果者因即不レ成。因何以故不レ得果等非レ因也。」(大正四五・五〇五c)

②⑥ 『華嚴經探玄記』卷四、「問此中既是十信菩薩現ニ成仏一者為レ是暫時化現ニ為ニ美成ニ耶。」(大正三五・一八九a)

②⑦ 『国訳一切經』經疏部七の訳註(八四頁)には、賢首品積のこの箇所を「行布、円融に約して信中に諸位を攝するに就きて」として、諸説を掲げている。